
魔ノ復讐鬼

鴉の翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔ノ復讐鬼

【NZコード】

N9618Z

【作者名】

鴉の翼

【あらすじ】

八神はやてには、嘗て一人の兄がいた。だが、彼は闇の書事件の後姿を消し、行方不明となっていた。彼は自身の肉親である妹から、彼女の騎士であるヴォルケンリッターから、妹の友人から、管理局から虐げられ、躱られ、やがては殺された。殺されたはずだった。新暦0067年、突如として巻き起こった管理局襲撃事件……それは嘗て、一人の少女のために奔走し、命を落とした少年八神はやての兄であつた少年　　八神寥弥の手によつて引き起こされた事だつた。　「あなたは、大切な人に裏切られた事は

ありますか?」
それは本来の歴史から外れきつた最悪の*if*…

プロローグ　～とある一人の少年だった鬼の話～？（前書き）

プロローグ　～とある一人の少年だった鬼の話～？

とある一人の男の話をしよう

あるときを境に、誰からも愛されず、理解されず、全てを失った
男の物語を

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

男は「ごく普通の家庭に生を受けた。そして「ごく普通に両親と暮ら
し、友人を作り、幸せな毎日を過ごしていた。そして男が三歳にな
った時、男には妹が出来た。男は幼いながらも願つた。「この幸せ
が一生続きますように」と・・・。

だが幸せとは脆く、儚いモノである。運命のいたずらと呼べぬ程に、
男の幸せは瓦解していった。

男が五歳の時に、不幸は突然に襲ってきた。ある日の夜、家族四
人で家で過ごしていた時に強盗がはいったのだ。その強盗は両親を
持っていた包丁で殺した後、まだ少年だった五歳の男の四肢を刺し
た。^{少年}男は激痛と両親を失つたショックで泣き叫ぼうとしたが、それ
すらもその強盗は許さなかつた。強盗は持っていたガムテープで男^{少年}
の口を塞ぎ、右目の人差指を突っ込んだ。当然、眼球は指の圧力に
耐えられる筈はなく、あっさりと潰れた。右目と四肢から血を流し、

氣を失つた男^{少年}を尻目に、強盗は家から粗方金を集めると、そのまま逃げようとした。だが唯一寝ていて無事だった妹が異変に気づき、強盗の姿を見て叫び声をあげた。その異様な叫び声に近隣住民たちは異変を察し、男の家に突入すると、其処には包丁を持つた強盗と腹から血を流し泣いている男^{少年}の妹、そしてその足元で血の海に沈んでいる男の姿があった。強盗は妹を人質にとり、警察を呼べばこのガキを殺すと叫んだ。人質を取られた住民たちはどうする事も出来なかつた。が、突如として強盗は顔を歪め、持つていた包丁を落とした。そして……

四肢から血を流し、右目からも血を流している男が強盗が持つていた包丁を手に取り、強盗の右胸に突き刺したのだ。強盗は体をビクビク痙攣させ、男に怒りと憎悪の念が籠もった目で睨み続け死んだ。
少年たちには暫く目の前で起こったあまりの出来事に放心し、中にはその光景を見て嘔吐する人間もいた。が我に返るとすぐに気絶した男と泣き叫ぶ妹を連れて病院に急行した。と同時に、警察にも連絡した。

その後、結果だけを言えば男は助かつた。妹も助かつた。だが男少年

の状態はあまりにも危険だつた。血を流し過ぎた事による貧血と、目を潰された事で其処から体内に侵入した雑菌の影響で、脳に障害が遺つたのだ。思考能力は問題ないが、運動能力が格段に低下し、両足が全く動かなくなつた。一生車椅子で過ごさなければならぬ生活を余儀なくされたのだ。貧血による意識障害で眠つている男を見て、いつそ死なせてやつた方がこの子のためではないかという声が上がつた。それは男少年が強盗とはいえ人を殺した事実に怯え、関わりたくないという住民たちと男の親戚たち全員が出した結論でもあつた。だがそれに異議を唱えた家族がいた。バーニングス家である。彼らは男少年の両親と交友関係にあつた。それだけでなく、バーニングス家は日本に來た際男少年の両親に色々な面で助けられたとか。日本有数の大企業となつたバーニングスグループに逆らおうという無謀な人間はいなかつた。男少年は意識を取り戻した後、妹と共にバーニングスの庇護を受けた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「ハアツ！」

「ぐああつ　　！？」

髪を後ろに一纏めにした女の木刀を受け、その痛みに悶絶する。女の後ろには青い狼と金色の短髪女が控えている。何故、自分はこんな目にあつてゐるのか。その疑問だけが頭の中に残つていた。

「いつまで倒れているつもりだ？　早く立て。貴様に今出来る事な

ど、私に翻られ続ける事だけなのだからな……」

木刀を強く握りしめ、女は再び構える。倒れ伏した自分に慈悲の一欠片も見せず、完全な敵として認識している。金髪の女同様、その目は敵意　そして僅かな殺意に満ちていた。

To be continued....

プロローグ　～とある一人の少年だった鬼の話～？（前書き）

2011年12月30日、修正しました。

プロローグ　～とある一人の少年だった鬼の話～？

男が八歳になつた時、妹は突然消えた。何の脈絡も、前兆もなく消えた妹を、男は探し続けた。警察に捜索願を出しても男の胸中から不安が消える事がなく、男は毎日車椅子に座つて昏倒するまで体を酷似した。妹を捜すために。だが何ヶ月経つても妹が帰つてくることはなかつた。

男が十歳になつた時、突然妹は帰つてきた。四人の御供を連れて。

それから男の不安と恐怖に染まつた日常は、痛みと絶望に塗り固められた日常捲問に変わつた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「兄ちゃん、また怪我したん？」

「ああ、階段から転げ落ちてな」

妹と話す男の体には、無数の擦り傷と青痣があつた。当然階段から落ちて付くような傷ではない。傷を負つた元凶である女は、妹の傍に立ち男を睨んでいる。金髪の女も、先程まではいなかつた三つ編みの幼女も同様の反応を男に示していた。唯一、青い狼だけは男に同情のような何かを感じさせるような目を向けていた。

妹も気づいてはいるのである。男に付いた傷が階段から落ちて付く
ような傷ではない事など…。だが妹は気づかないふりをする。それ
は何か　妹は男を嫌悪しているからだ。両親が死ぬ原因となっ
た存在と思い込んでいるからだ。男が苦しみ、悶える姿を見て両親
がいない悲しみを紛らわせる慰み物としているのだから…。

妹は男に御供の四人の事を話さなかつた。そして御供たちもまた、
男に自分たちの事を一切話さなかつた。妹が帰ってきて一週間ほど
たつたある日、御供の一人である桃色の髪をした女が車椅子に座つ
ている男に襲い掛かつた。勿論、急に襲われて対処できる人間など
いない　男は、その女が握りしめる木刀の一撃を受けて頭から血
を流して気絶した。

男が目覚めた時、そこは河原になつていた。そして自分の体は地面
に倒れ伏し、目の前には桃髪の女が立っていた。男は尋ねた。何故
こんなことをするのか、と。女は答えた。それは貴様が諸悪の肩で
あるからだ、と。会話になつていらない会話に男はますます困惑する
が、女はそんな事は関係ないと言わんばかりに男に再び襲い掛かつ
た。拷問紛いの行為が終わる頃には、男の体は木刀による打ち身で
出血し、青痣だらけとなり、酷い箇所は骨が飛び出していた。

だが何故か、自分の体で骨折している箇所がみるみるうちに治つて
しまつた。まるで魔法のように

それから男は一年半もの間、ある時はゲートボールに使うハンマー
を持った三つ編みの幼女に殴られ、ある時はポニー・テールの桃髪の

女に翻られ、またある時は金髪の女が作った料理を口に入れられた
毒物

りした。

そして男は12月25日、クリスマスの日に姿を消した。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

“ a a A a ”

そうして男 ハ神寥弥の人生は、12歳という若さで幕を閉じた。
その理由は何れ語られる事だろう。

そして、第2無人世界・パンドラにおいて、ハ神寥弥だった復讐鬼
が誕生した。時は新暦0067年。寥弥の妹であったハ神はやて
が11歳の時、復讐鬼は動き出した。

誰にも頼らず、己が命を落とす原因となつた全ての者に復讐するた
めに・・・

復讐鬼は歯を剥き出しにして、獣のように吼えた。その咆哮は、憤怒
と憎悪に満ちていた。

人間だった頃の面影はなく、その姿は黒い瘴気のような物に包まれ、
骨が所々飛び出て赤黒く汚れた血液が至る所から流れ出ていた。化
物と形容すべきその肉体は、とても12歳の少年だったモノだとは
思えなかつた。

プロローグ　～とある一人の少年だった鬼の話～？（後書き）

この小説を再び書き始めて友人Fに言われた一言。

「お前、この年末に何てモン書いてんだ！」

自分「（――）！！」

闇話（前書き）

新年まであと一日。

今回は（R18）です。なるべく表現を柔らかくしましたが、嫌悪感を感じた場合は即座にバックをお薦めします。

（まあ、結構重要な伏線なので見た方が良いとは思いますが…）

2011年12月31日、修正しました。

これは一人の人間の話　いや、正確に言えば一人の少女の姿をした天使の話である。

この天使もまた鬼と同じように、他者から虐げられ、理解されなかつた存在だった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

少女は特殊な生まれだつた。次元世界の治安保持のための組織・時空管理局が秘密裏に実行していた計画・Angel project……通称プロジェクトA　その実験体として、第6管理世界に存在する龍の遺伝子と第17管理外世界に現存する巨大な鴉の遺伝子を用いて生み出されたのだ。龍の鱗が体のあちこちに存在し、背中には漆黒の翼が生えていた。龍の保有する高い治癒の特性と、鴉が保有する敏感とも云える高い直感力により、少女は実験体の第一号にして既に完成体と言わっていた。だがその結論に異を唱えた科学者がいた。その科学者は一番下つ端で、本来なら意見すら言う事を許されていない。だがある事情で、彼の意見は他の科学者たちにも賛同される事となつた。

「…………」

少女は何も話せない。生まれ出でた時から言語能力を有し、意思疎通を行えるにも拘らず、彼女は口に猿轡をされ、一言も話す事を許されていない。それは科学者や研究員たちに、意思疎通で情が芽生える事がないようにという配慮と、彼女の存在がプロジェクト成功のためのただの道具でしかないという事を彼女に理解させるためである。

「…………」

猿轡で話す権利を剥奪されている少女は、その両手両足に鋼枷を付けられ自由に行動する権利すら剥奪されている。衣服はおろか薄い布の一枚すら纏つていらない生まれたままの姿でうつ伏せで地面に倒れ込んでいる彼女は、特に寒いわけでもないのに汗で濡れ、雪のように白い肌は淡く紅潮していた。美しい顔立ちも相まって、まともな男であれば内から湧き出る欲求に従順に行動するだろう

閑話休題

彼女は自分の体の異常に達観していた。また何かの実験であろうという予想をしており、事実それは正解だった。だがそれは、普通の人間なら心の底から嫌悪するであろう内容だった。

“アレの中にある性を利用すればいい。もっと良い実験結果が取れるだろう”

下つ端の男が発した異論は、他の科学者のみならず研究員ですら呆れさせた。下卑た笑みを浮かべてそう主張する男を見て、研究主任は男の意見を却下しようとしていた。だが、研究主任が却下する前に、他の科学者たちは一人、また一人と賛成し始めた。極秘でプロジェクトに取り組むメンバーの大半は、情報漏洩を恐れた上層部の命令により、主任含む極僅かな人間以外は外部の人間との接触の一切を禁じられていた。破れば即座に処罰される規律に逆らう愚者がいるばずがなく、家庭があろうと独り身であろうと持て余した欲求が抑えておけるような状況ではなかつた。

“研究を自己の欲のために利用しようとした”とでっち上げの報告をされた主任は機密保持のために殺され、欲求に従順な男だけが残つた。主任と同じく反対しようとした人間もいたが、同じように処罰された。少女の体に媚薬を注入し、性の欲求に苦しむ少女は、望んでもいい行為を強制され、初めて涙を流した。日を増す毎に比例して欲求は強く、大きくなつていつた。それと同様に、科学者や研究員の欲求もまた増大していつた。少女は快樂に溺れる事も出来ず、ただその行為によって自分の体が穢れる度に慟哭の涙を流し、自分の肢体を穢す男カラダ 否。雄達に対して憎悪の念を募らせていつた。

「……！　これは　」

ある日の事。白く濁つた液体で全身が汚れた少女の体には、莫大な魔力が内包されていた。雄達への憎しみで気づかなかつただけなのか、それとも行為の前に注入された媚薬の影響か 疑問が頭の中で浮かんでは消えを繰り返すが、それらの全てを忘却の彼方に追いやり、己の四肢に渾身の力を込め魔力で強化し思いつきり動かす。その後、鎖が碎け自由に動くようになる……猿轡を取り除き、口

から殺意と憎悪を解放した。

「

！――！

「

その瞬間、周りに存在した機械と慌てふためく雄達が消し飛んだ。白く美しい……神々しい光の束によつて、その存在を此の世から消滅させた。光は徐々に大きくなり、あらゆる存在を飲み込み、消滅させる。雄達が光に飲み込まれる前に見せた表情は、恐怖と絶望の色で醜く彩られていた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

光は少女そのものだ。

触れた物体がどんな形状をしていようと結果は何ら変わらない。

分子・原子レベルで崩壊・消滅をせる。

それにどんな情報があつと、それすら巻き込み消滅させる。

少女の頭にその情報の全てが流れ込んだ後に。

＝＝＝＝＝＝＝＝

「時空、管理局・・・」

光が納まつた後・・・全てを分解・消滅させた少女は漆黒の翼で己の裸体を覆い隠し、消滅させた物体から入手した情報を吟味し、一つの結果を編み出した。

「滅亡させてやる・・・その存在一片たりとも残さずにしてやる。」

一枚の翼で己の肢体を隠し、新たに生まれた一翼四枚の白い翼で
空を舞い、淡い光を放つて消えた。

閑話（後書き）

自分「これどうよ？」

友人F「妄想100%つぱりで吹いた」

自分「！？」

ACT・1（前書き）

天ノ邪鬼様、パパラガス様。感想ありがとうございます！

今回は内容が濃いです。でも短いです。

フエイト・T・ハラオウンは漆黒の闇の中にいた。何も見えず、何も聞こえない……だが感じる事は出来た。
体に触れる闇の底知れぬ密度・大きさを、重さとして感知できる。此処は何処なのか。そんな疑問が口の中から漏れ出たところで、気づいた。

コレとは違う闇を、嘗ての自分は味わった。密度は違うし何よりこの闇の中に秘められている感情は以前の闇とは異なっている。以前の闇は悲しみと罪による絶望……言つてしまえば、罪を犯した人間が胸の内に宿すような——昔前の自分が胸の中に潜めていた気持ちに似ていた。
だが今味わっている闇は違う。憤怒と憎悪で充ち満ちている。それ以外の感情の一切が排除され、ある種の純粹さがあった。しかしひエイトがこの闇について理解できるのはそれだけだ。今の彼女の胸の内には、不安と恐怖……そして圧倒的な死の予感だった。

「これは一体……？」

自然と口から出た疑問に答えたのは、やはり闇だった。

” 我は 蔑まれし者 疎まれし者 嘲られし者 ”

何処かで聞いたことがある声……そう思った直後、目の前で濃密な影がぞわぞわと蠢き、人の形になる。
一見して、それは悪魔が死人の姿をしているような 生者が見れ

ば誰でも田を背けたくなるような姿をしていた。所々から骨が飛び出しており、骨を伝つて血の川が止め処なく流れている。皮膚からは腐敗臭が漂い、爪は剥がれ其処からも血が溢れている。体から大量の血を流し続けるそれを見て、フェイトは口を抑え猛烈な吐き気に耐える。

” 我が名は万人に憎悪される 我が身は此の世に遍くすべての存在に喰い潰された肉片の集い ”

其処で言葉が途切れる。同時に、喉を血で塗れた腕で掴まれる。呼吸が上手く行えず、手足に抵抗のための力がこもる。だがどれだけ抗おうと、血塗れの腕から逃れる事は叶わなかつた。

” 故に 我は憎悪する。嫌悪する。憤怒する。 我を貶めし貴様らを……永遠に報われる事のない咎の地獄に誘つてやろう ”

あまりの恐怖で、意識が途切れた。その瞬間に、自分の喉が握力で潰れる感触と風船が破裂するような音が耳の中に届いた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

“ a a…… u r r r r…… ”

時空管理局・次元執行部隊本部。周囲には無数の艦船が飛び回り、各々の目的で散開している。

” 彼 ” はそれを見てほくそ笑んだ。あの巨大な建築物の中には、自

分を貶め死に至らしめた存在がいる　嘗ての妹と、それに憑いて
回る有象無象の虫けら　それらを感じとり、”彼”は貌を狂氣で
染める。

“GyaaaaaaaaaaaaaaaaAaaaaaaaaaaaaaaaAa
a a a - - - - - ! ! ! ”

右手で鉄の塊を、左手で剣を握り締める。鉄の塊は全長にして8m程の突起物、重さ数十トンあるうかという物だ。剣はまるで闇が形を変えたような見た目をしており、ただひたすらに黒く一切の装飾がされていない。ただ殺すためだけに存在する武器だった。

a A a - - - - ! ! ! ”

双眸を憎悪で血走らせ、”彼”は右手に持った鉄の塊を振り上げる。骨が軋み、肉が裂ける音が響くが、そんなことを気にする”彼”ではない。歓喜にも似た憎悪の叫び声を上げながら、”彼”は全力で鉄の塊を投擲した。

それが、今回の戦争の始まりの合図となつた。

To be continued.

ACT・1（後書き）

大晦日最後の投稿です。多分……

友人F「いや、頑張れば逝けるだろ」

ゑ・・・?

ACT・2（前書き）

奈落の花様、パバラガス様。感想ありがとうございます！

今回あまり話が進みません。ゴメンナサイ（／＼・）

惨劇は突然に、何の前触れもなく開始された。

施設内に轟いた爆音と、死に際の獣が放つような狂声によつて、ほとんどの局員がそれまで行っていた活動を止め、状況把握のために動き回っている。そんな中、八神はやては自身が行つている『作業』の最終段階を済ませようとしていた。

自らのリンクアーコアをコピーし、それを利用してのユニークンデバイスの作成 言葉にすれば簡単であるが、失敗すれば命を失いかねない程に危険な作業だった。

だがリンクアーコアのコピーは成功しており、後は独立行動及び単独魔法使用……そして“意志”を作るだけだ。管理局の技術者たちは優秀な人間ばかりだつたし、貴重な素質を持った魔導師を失いたくないという上層部の意向があつたため、細心の注意を払つて行われた。

「…………ふう」

最後の作業が終わり、安堵の息を吐く。何やら外が騒がしいが、其処は後で確認すればいい そう彼女は思つていた。

そう、この時までは。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

前代未聞の時空管理局襲撃事件。それを聞いたとき、男は小躍りした。

”彼女”が言った通りの出来事が起きたのだ。あまり信じてはいなかつたが、実際に起こった惨状に男の興奮は冷めきらず、傍にいる女性に話しかける。

「いやあ～、すごいな。”彼”は！死んでもなお、自力で、屍のまま復讐を実行するとは！！」

「全くですね。ドクター……しかし、何故”彼女”は”彼”が行うと知っていたのでしょうか？」

男はその疑問に頷くと、解答を口にする。

”彼女”は”特別”だからね。さながら聖者のようにいて、人の闇を拒むのではなく受け入れる。……まるで神のようだ

男の目には羨望と狂おしい程の愛情に満ちていた。まるで普通の人間のように、異性に恋した男子のように……

女性は男の様子に溜息を吐くと、今度は”彼”について尋ねる。

「”彼”はどうするのです？まさかこのまま放置なさるおつもりですか？」

「いや……それをやると”彼女”が怒る。それは避けたい、何としても・・・」

男はモニターに映る”彼”を見る。右腕が負荷に耐えきれず皮膚が完全に裂けており、骨だけで繋がっている。モニターの中の”彼”は左手に持つ剣で右腕“だつたモノ”を切り落とした。その後も何度も常軌を逸した行動を繰り返す”彼”に耐えかねたのか、女性は口元を両手で押さえつける。

「そりだな……。ちょうどあの子の調整も終わったところだ。時空管理局にバレないよう注意して向かうよう言つてくれ」

「へへ、はい。ドクター」

内から湧きあがる吐き気を何とか抑え込み、女性はあの子と呼ばれた者の元に走つて行つた。

女性の後ろ姿を見て、男は笑みを零す。

「まつたく……。」この程度で怯えていては、この先やつていけないよ? ウーノ」

白衣を着た男は、再びモニターに目を向ける。其処には、局員を左手で斬り殺し続ける”彼”的姿が映っていた。

ACT・2（後書き）

今回これが今年最後の投稿です。

皆さん、よいお年をー。(>^<)ー！

ACT・3（前書き）

A S様、あると様、パパラガス様。感想ありがとうございます！

新年第一回の投稿ですが、次回の投稿は一週間後くらいになりそうです。

バイトと学業が明日から始まるので、執筆する時間があまり取れな
せうなので…（――：）

読んでくださってる方に申し訳ないと思いますが、御理解願いま
す。

本当に「めんなさい」（↖→↖）！ その分次回の内容は濃く深いモ
ノにしてこきたいと思います。

嘗て死んだ八神寥弥には、魔導師の資質はなかつた。理由は簡単で、彼の体内にリンクーコアがないからだ。

だから”彼”は、自らの屍体に一つのモノを入れ込んだ。リンカー
コアの代わりになるものを・・・

そもそもリンクアーコアとは、大気中の魔力の素を吸収し体内で精製した魔力を取り込む機関のことだ。通常、魔法を使う者は皆が皆体内に所持している。

”彼”が体内に取り込んだモノの一つは、魔力を精製し一時に溜めこむ機能を持つロストロギア・『魔の青翠』。これは体内のあるモノを犠牲にして駆動する永劫機関である。何を犠牲にするか、それは

初撃を本局のある場所に命中させた”彼”は、足に魔力を込め爆

発させる。

それだけで、
”彼”的の体は人間では有り得ない速度で移動する。本

局で何が起つたのか確かめようとして動き回っている艦隊は”彼ら”から発せられる凶悪な魔力の渦に巻き込まれ、爆炎と鮮血を撒き散らし破壊されていく。

そして本局の壁に到達すると、左手に持つ剣で力任せに奮う。技とか手加減とかそんなモノは一切関係ないと言わんばかりの一閃によつて、壁はまるで豆腐のように切り裂かれ、大きな穴が開く。其処から”彼”は自分の体から血飛沫を撒き散らし突入する。床には血の池が溜まり、驚愕の表情を浮かべた人間の死体がゴミのように散らばっている。

”彼”はその中からまだ息がある人間を見つけると、いつの間にか元に戻っている右手で頭を掴む。そして渾身の力で握りつぶすと、死体になつた元人間の体を放り捨てる。

手に付着している大量の血を腐敗した舌で舐めている”彼”を見て、一体誰が”彼”を人間だと呼べるだろうか？　体のあちこちから骨が突き出しており、穴という穴から鮮血を流し続ける”彼”を見て、一体誰が”人間”だと思えるだろうか？
〔三〕

そんな人間はいない。少なくとも、時空管理局には・・・

突如、”彼”的体に桃色の魔力弾が降り注ぐ。咄嗟に剣を振ったおかげで半分ほど当たらずに済んだが、残った半分の魔力弾は”彼”的体を容赦なく抉り取る。

再生された右腕が千切れ飛び、左手に握られた剣が碎かれる。勢いよく硝子が割れるような音を出して、剣は”彼”的手から離れる。”彼”は魔力弾が飛んで来た方向を睨みつける。其処には、自分が死ぬ要因を作った仇の一人が新たな魔力弾を作りだし、敵意の眼差しで睨み返してくる少女の姿があつた。

「アーティスト」

一斉に”彼”を標的に向かつてくる魔力弾。その数、およそ12。

だが”彼”は気にすることなく、少女に向かつて突き進む。肉体を抉り更なる血飛沫が宙を舞つも、”彼”的歩みを止める事は出来なかつた。

少女に肉薄するや否や、”彼”は再生した右手を彼女の体に突き刺さんとして、動きを止めた。何故なら

「なのは！ 大丈夫！？」

「フハイちやん!!」

”彼”の腹から金色の魔力刃が生えていたからだ。そして後ろから聞こえた声に、”彼”は歓喜する。新手として現れた少女もまた、仇の一人だからだ。突き出そうとしたままの左腕を腹から生えてくる魔力刃に宛がうと、金色だつた刃は赤黒く変色していく。

「！？」
「……！」

なんとか突き刺した己の愛機・バルディッシュを抜き取ろうと必死に腕に力を込めるが、全くビクともしない。やがて本体の杖にも赤黒いソレは浸食してくる。仕方なしに、彼女はバルティッシュを手から離して距離を取る。同じように距離を取つた自らの親友・高町なのはもバルディッシュに起こつてゐる異常に言葉を失くしてい

パキーン、と硝子が割れるような音が響く。その発信元は、バルティッシュの本体 杖に埋め込まれた宝石からだった。

【 ゝ…… ゝ…… 】

輝が入った宝石から壊れかけの機械が出る不快な音が鳴る。それがバルティッシュの限界だった。宝石から完全に金色がなくなり、漆黒に支配された。同時に”彼”は己に刺さつたままのバルティッシュを抜き取り、少女たちに向かって構える。武器を構えた”彼”から感じた殺意は、もう一人の親友の兄が死に際に放つた憎悪と殺意に酷似していた。

「ま、まさか・・・・！」

「寥、弥さん・・・・！？」

嘗て見た姿とは程遠い外見だったのに加え、歪な魔力を放つ目の前のコレがハ神寥弥とは、二人は信じられなかつた。信じたくなかつた。

驚愕の表情で立つ二人を見て、”彼”はハ神寥弥だった屍は再生途中の口を歪ませた。

To be continued・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9618z/>

魔ノ復讐鬼

2012年1月1日21時31分発行